

# 国語(現代文・古文) 大阪大学 法・外国語・経済・人間科学部 (前期) 1 / 4

## <総括>

出題数 現代文 2題・古文 1題

試験時間 90分

- ・Ⅰは、人間や他の哺乳類のように特定の機能を割り振られた器官を持たないまま、水と渾然一体となって浮遊しながら、魚類とは異なる海の食物網を生きているクラゲの特性を踏まえた評論文からの出題であった。  
出題された本文中で、そうしたクラゲの融通無碍な生のありようが人間や社会の現実にとっていかなる意義を持つのかという（当該文章中の後の部分で展開されるであろう）論旨が展開されるに至らなかったという点は残念である。  
空欄補充の問題が出題された。  
設問の数は前年度と同様に四問であった。
- ・Ⅱは、個人が排他的にモノを所有する権利を持つという近代社会の私的所有の考えとは異なり、富者から貧者への贈与や分配を基にする社会規範を遵守して社会全体の経済実践を成り立たせ、魂の込められたモノを介して社会の紐帯を維持しつつ自己の確立をも促していくという、経済的には発展途上にあるタンザニア社会の意義を論じた評論文から出題された。  
設問の数は、前年度の五問から四問に減少した。
- ・前年度までに見られた「〇〇字から〇〇字で」という出題はなされなかった。
- ・前年度同様に、大問のⅡで漢字の書き取り問題が四題出題されている。
- ・Ⅰ（四〇〇字以内、前年度は三八〇字以内）とⅡ（四一〇字程度、前年度は五二〇字以内）を合わせた記述すべき総字数は、前年度の九〇〇字以内と比べるとやや減少したが、相変わらず限られた時間の中で納得できる答案を作成するには時間が足りないと言わざるをえない。

## <本文分析>

大問番号	Ⅰ	Ⅱ
出典 (作者)	『「くぐり抜け」の哲学』(稲垣諭)	「手放すことで自己を打ち立てる——タンザニアのインフォーマル経済における所有・贈与・人格」(小川さやか)
頻出度合 ・的中等	なし	なし
分量 前年比較	分量(減少・やや減少・ <b>変化なし</b> ・やや増加・増加)	分量(減少・やや減少・ <b>変化なし</b> ・やや増加・増加)
難易 前年比較	難易(易化・やや易化・ <b>変化なし</b> ・やや難化・難化)	難易(易化・やや易化・ <b>変化なし</b> ・やや難化・難化)

## <大問分析>

2 / 4

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
I	評論	問一	選択式	標準	空欄に入る語句を選択する問題 (選択肢4つから1つを選ぶ) ※ 空欄部分の直前の文脈を踏まえる。
		問二	記述式	標準	傍線部について、本文の内容に即して説明する問題 (一二〇字以内) ※ 本文冒頭から第9段落までの内容を中心に、クラゲの生の実態と「私たちの経験」の特性を踏まえる。
		問三	記述式	標準	傍線部について、本文の内容に即して具体的に説明する問題 (一六〇字以内) ※ 傍線部の直後の内容を中心に、「前者 (魚類の食物網)」と「後者 (クラゲ類の食物網)」の特性を踏まえる。
		問四 (ア)  (イ)	記述式  記述式	標準  やや難	傍線部 (2箇所) の理由を、本文の内容に即してそれぞれ説明する問題 (各六〇字以内) (ア) ※ 人間がクラゲを観察の対象として美化するありようを踏まえる。 (イ) ※ 人間とクラゲとが「離接する」というありようを、本文の注も参照したうえでまとめる。
II	評論	問一	記述式	標準	漢字の書き取り問題 (四問「困窮」「操業」「奴隷」「執着」)
		問二	記述式	標準	傍線部について、本文の内容に即して説明する問題 (一八〇字以内) ※ 第3段落までの内容を踏まえ、「欧米諸国や日本」と「タンザニア」の「持たない暮らし」の差異を捉える。
		問三	記述式	標準	傍線部について、本文中の表現を用いて説明する問題 (五〇字程度) ※ 「私的所有」の考え方が述べられた第10段落の内容を中心にまとめて。傍線部の内容そのものではなく、それが「基づいている」「考え方」を記述する。
		問四	記述式	標準	傍線部についての筆者の考えを、本文の内容に即して説明する問題 (一八〇字以内) ※ 傍線部の内容と前後の文脈を踏まえつつ、「タンザニア社会における意義」と「筆者」の「考え」とに配慮して解答をまとめる。

※難易度は5段階「難・やや難・標準・やや易・易」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

## <学習対策>

- ・ハイレベルの評論文を中心に、全体の主旨や意味段落の論旨を的確に要約する練習とともに、設問の意図を正確に理解したうえで、答案を書き出す前に的確に解答のポイントを検討・整理した上で答案を作成するという練習を重ねよう。
- ・有力な得点源である漢字問題の対策をしっかりとやっておきたい。

国語(現代文・古文)大阪大学 法・外国語・経済・人間科学部 (前期) 3 / 4

<総括>

出題数	現代文 2題・古文 1題	試験時間	90分
<p>・法・外国語・経済・人間科学部の出題として随筆がとりあげられたのは、過去十年間で言えば例を見ない。ただし、今年度の文章は内容的に評論と言えるものなので、2023年度(『秋香歌かたり』)に近い出題である。なお、年度をさらにさかのぼれば、今年度と同様の国学者による文章が二度出題されている。</p> <p>・本文の文章量は前年度にくらべて増加しているが、文章の難易度は標準的。論理的に整然とした内容なので、平安朝の文章などにくらべると、受験者にとっては平易と感じられただろう。</p> <p>・設問構成はほぼ例年どおり。</p> <p>・説明問題について、字数制限の出題はなかった。これは前年度と同様。過去十年程度を見た傾向としては、字数制限を設ける形式での出題もある。</p> <p>・例年よく出題されている和歌に関する設問が今年度は見られなかった。なお、本学部で和歌の出題を見なかったのは2014年度以来。</p>			

<本文分析>

大問番号	Ⅲ
出典 (作者)	『玉勝間』五の巻「枯野のすゝき」 (本居宣長)
頻出度合 ・的中等	出典は有名。的中なし。
分量 前年比較	分量 (減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加) 約1510字 (昨年780字)
難易 前年比較	難易 (易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
Ⅲ	随筆	問一 (ア)	記述式	標準	現代語訳。「かく」の具体化不要の指示あり。着眼点となる重要語句等は「をさをさ」「だに」。また、「誤れる」の助動詞「る」(完了・存続)にも注意。
		問一 (イ)	記述式	やや難	内容説明。挙げられた例に従って仮名遣いの正書法からの誤りを具体的に説明する。
		問二	記述式	標準	現代語訳。代名詞の具体化不要の指示あり。また「一つの本」の具体化も不要とあり。着眼点となる重要語句等は「～なす」。また、「なりし」の助動詞「し」(過去)、「にぞ」の助動詞「に」(断定)、「有るべき」の助動詞「べき」(当然・推量)にも注意。
		問三	記述式	標準	内容説明。傍線部前の数行の文脈をふまえて「こころえぬ」内容を説明する。
		問四	記述式	標準	現代語訳。代名詞「こ」の内容を具体化する指示あり。着眼点となる重要語句等は「てふ」「さ」「え……ぬ」。また、「ならで」の助詞「で」(打消接続)にも注意。
		問五	記述式	やや難	内容説明。本文の趣旨をふまえ、「この本」の書き手の言葉遣いの誤り理解したうえで、筆者が「この本」のある一節を例としてどのように過誤の判断を理解していったかを説明する。

※難易度は5段階「難・やや難・標準・やや易・易」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

- ・重要古語や語法等の知識に習熟して、正確に現代語訳できる読解力を養うことが重要である。
- ・主語、目的語、指示内容などを考えながら、文章全体の展開や主旨を正確に理解する練習を平素から行うこと。
- ・現代語訳のみならず説明問題においても、文章全体の展開や主旨をふまえた記述力が要求されている。また、例年の傾向として、説明問題に字数制限が課されることも多いので、字数制限のある説明問題の演習も行うべきである。
- ・例年の傾向から、和歌について、和歌修辞や比喩を理解する学習や、説明問題をも意識した解釈の演習が必要である。